

3.11 原発事故をめぐる小学生新聞の投書

設 樂 馨

(武庫川女子大学文学部日本語日本文学科)

3.11 The Nuclear accident in a Newspaper for Children

Kaoru SHITARA

*Department of Japanese Language and Literature, School of Letters
Mukogawa Women's University*

Abstract

This study examines newspapers published for elementary school students. *Asahi Shogakusei Shimbun*, *Mainichi Shogakusei Shimbun*, and *Yomiuri KODOMO Shimbun* are three of the most popular newspapers for elementary school students in Japan. Newspapers generally include reports and editorials. However, these newspapers incorporate numerous articles that are directly concerned with subjects such as science, history, and the national language (Japanese). In addition, these newspapers are used in the elementary school curriculum. In terms of appearance, newspapers meant for children use larger written characters, less kanji, abundant illustrations, and multicolored printing. In doing so, they present an adult concept in a childish style.

This paper considers the viewpoint of children to discuss the coverage of the nuclear power plant accident by children's newspapers and to suggest an appropriate style for them. After the 2011 Earthquake in the Pacific coast of Tohoku, the children's newspapers published varied opinions offered by their readers. For example, an elementary school student accused everyone of overusing electricity, a junior high school student blamed the government, and one mother accused the Tokyo Electric Power Company (TEPCO). These letters to the editor in newspapers were written to be read by children, and not by adult editors. This paper addresses the following questions: What are the intentions of child readers who become writers? Do their text styles differ from those used by adults when these readers become writers? Finally, what is the appropriate writing style for children?

1. はじめに

言語研究において、研究対象としての新聞は従来、大きな意味を認められてきた¹⁾。継続的・習慣的に読む新聞のことは、読者である一般の人々に大きな影響を与えるものだと考えられるからだ。新聞には、大人向けの一般紙以外にも、言語形成期である小学生向けに発行される新聞¹がある。それら新聞は、2012年の学習指導要領変更以後、「教育に新聞を」(通称、News in Educationの頭文字をとってNIE)という潮流が浸透し、教育現場に取り入れられつつある。試みに、本学短期大学部日本語文化学科1年生43名に尋ねたところ、半数近い20名が「小学生のとき読んだことがある」と回答した。彼女たちは、社会科や国語科の授業で教材として読んだり、図書館やクラスで自主的に読んだり、また、自宅で購読していたという。

新聞の中でも投書は、建前としては一般の読者による文章である。「編集者によって手を入れられて

いることは周知の事実¹⁾としても、一般の人々の言語意識が反映されたものだと考えられる。本論では、新聞の中でも未だほとんど研究対象にされていない、小学生新聞を扱う。小学生新聞の中で、国語力を育成しつつある読者によって書かれた投書を調査対象に、言語的特徴を計量的に分析して論じる。加えて、調査対象を3.11 原発事故に起因したエネルギー問題に限定し、投書のテーマや言語的手段、投書掲載のレイアウトを批判的談話分析の手法を用い分析して、小学生新聞における投書の全体像を描きたい。

2. 調査対象

一般紙と異なり、小学生新聞に定期的に掲載される投書コーナーは無い。そのため、本論では、2011年3月に起こった東日本大震災の、原子力発電所の事故責任を巡って読者同士で交わされた、「ゆうだい君の手紙」と題された投書群を調査対象とした。具体的には次の一連の掲載である。(末尾の「資料」に見出しを挙げる。また、以後で紙面を引用する場合は、振り仮名を省略する。)

「ゆうだい君の手紙 東電と原発 キミはどう思う？」

5月30日・31日・6月1日(第26088号、第26089号、第26090号)

「続・ゆうだい君の手紙 東電と原発 キミはどう思う？」

6月20日・21日(第26108号、第26109号)、7月27日(第26144号)

中高生や大人の投書者を含め、投書者の合計は39名だった(内訳など詳細は4章に譲る)。

この投書群は、2011年8月に『「僕のお父さんは東電の社員です」小中学生たちの白熱議論！3.11と働くことの意味』²⁾(以下、サブタイトルは略す。)として出版された。書籍は、新聞の投書と異なったり、末尾の投書者の情報が詳しくあったりするので、適宜、参照する。

まず、投書が掲載された一連の経緯を、『僕のお父さんは東電の社員です』末尾の「出版に際して」からまとめると、2011年3月27日「毎日小学生新聞」の「ニュースの窓」(一般紙の社説に準じる内容)において、元毎日新聞記者で論説委員の北村龍行氏が、東京電力の無責任な体質を指摘したことに端を発する。この記事を読み、東京電力社員の子どもで小学6年生のゆうだい君(仮名)が、編集部の手紙を送る。編集部員がゆうだい君の自宅にて本人と両親に面会する。東京電力の社会的責任が避けられない段階になった5月18日、「毎日小学生新聞」1面で手紙の経緯を、2面で手紙の本文を一部省略して掲載し、同時に読者へ投稿を募る。

投稿を募る紙面として、1面と2面のレイアウトを確認しておく。見出しについて、1面は「僕のお父さんは東電の社員です」が最も大きなサイズの文字で配置される。2面は「ぼくは、みんなで話し合うことが大切だ、と言いたい」が最も大きなサイズの文字で、「ゆうだい君の手紙(一部省略しています)」は、やや小さい。こうした見出しは、大きさに加えて、縦書きの文章が基本となっている中に、横書きにすることで視覚的に強く訴える。2面の「ぼくは(以下略)」は、最も大きな文字サイズであることに加えて横書きで、目を引く効果が強いものとなっていた。

レイアウトの一部として、図も分析する。すると1面に、福島市立飯野小学校での運動会が、原発の影響により体育館で行われた写真がある。末尾に、「ゆうだい君の意見を読んで考えたことを、編集部の手紙で送ってください。紙面で紹介します。」とあり、手紙の宛先を明示する。2面には、2008年の「発電の内訳」(原子力のほか、天然ガス、石炭、火力等)と、「日本の電力会社がつくる電力量の移り変わり」のグラフがある。

以上の見出しや写真、グラフを交えて読むと、投書群のきっかけとなった「手紙」は、特定の編集意図が認められる。それは、「手紙」に対し、次世代を担う小学生にとってのエネルギー問題として読解し、読者自身が意見交換を進めてほしい、というものである。その編集意図の元、「手紙」を読解した投書者が投書を送った。

3. 文章スタイル

先行研究を手掛かりに、本調査対象の文章スタイルを整理する。先行研究として、一般紙の投書の計量的分析と、「毎日小学生新聞」の表現特性を扱った論考が存在する。

(1)一般紙の投書と比べて：計量的分析

計量的分析について、先行研究¹⁾では、投書データのサンプリング採取によって作成したデータファイルを用い、文と単語レベルでの集計結果を考察する。その結果、投書内容を公的なテーマと私的なテーマとで分類している。本稿の調査対象はすべて公的なテーマに該当する。公的なテーマの基本スタイルについて、引いておく¹⁾。

大枠としてはいずれの文章も要約的な性格をもつと考えられた。新聞の投書という形式は、公的なテーマの文章の方がより要約的な色彩が強く(以下、略)

加えて、新聞の投書欄が明治以来の長い歴史をもつことを指摘し、次のような示唆を与えている¹⁾。

こうした長い歴史の中で、掲載された文章の数は膨大な量になると同時に、掲載されなかった文章はその何倍にも及ぶ。投書をしようとする人は掲載されることを求めているはずで、そのような人々にとって、掲載された投書は一種のお手本となろう。掲載された投書に対して、それとは異なった新しい形式を生み出すよりも、掲載されることを求めて、形式の模倣に走る可能性は当然高くなると推測される。その結果、いわば歴史のある投書界における伝統的なスタイルが守られることになるのではないか。

本調査対象は、そもそも社説の書き手であった元論説委員の文章に対して、編集部が届いた小学6年生の書き手による意見文から始まる。つまり、小学生向けとはいえ、「社説風」に書いたものに対して意見を述べたものである。その意見を読んで考えたことをもとに作成された投書群である。「掲載されることを求めているはず」という側面とともに、書き言葉の経験が浅い小学生ならば、投書のきっかけとして読んだ文章が即座に影響する、ということは想像に難くない。

試みに、小学6年生による意見文及び、小学6年生が意見の元にした社説、そして、本調査対象(A)(B)(C)、計3種の文章について、MVR²と文長(対象全文を平均した値)を計量した(形態素解析処理はMeCab⁴⁾を使用)。すると、投書としてはMVR、文長ともに一般紙と小学生新聞のそれとで大差ない結果となった。

表1 計量的分析結果(MVRと文長)

	MVR	文長(文字数)
一般紙の投書(佐竹(2009)の全587件の投書から求めた値)	40.5	37.1字
(A)(B)(C)小学生新聞の投書(全39件の投書から求めた値)	41.25	36.59字
元論説委員による社説	50	39.44字
小学6年生による意見文	54.69	30.43字

表1に挙げた、MVRが40や50といった数値は、投書の修飾語(M)の比率が抑えられていて、ありさまやようすの描写は少なく、比して動きの描写が多いことを示す。一般紙の投書「40.5」と小学生新聞の投書(A)(B)(C)「41.25」という値は大差なく、文章の書き手が一人である社説「50」と小学6年生による意見文「54.69」では、数値がさらに上昇していることがわかった。

文長に関して、佐竹(2009)の結果では、私的テーマで、字数が減少している。私的テーマは、そのテーマ故にデス・マス体が増える、という。平均字数は、公的テーマ 39.5 字、私的テーマ 35.0 字であった。本論が取り上げる小学生新聞の本紙そのものは、デス・マス体が基本で、本調査対象(A) (B) (C)もデス・マス体が多い。小学 6 年生による意見文も「もちろん、東京電力です。」のようなデス・マス体が基本の文末形式である。そして、大人の書いた社説は、ダ・デアル体だ。デス・マス体は、1 文の文長が短くなる傾向があるのかもしれない。

(2)子どもらしさの生成をめぐる：文章スタイルが読者に与える印象

一般紙「毎日新聞」と小学生新聞「毎日小学生新聞」を比較するなかで、特に語句選択に詳しい湯浅(2007)⁵⁾によると、小学生新聞の文章は話しことばの特徴へと近づけ、「子どもらしさ」を生成するとの指摘がある。また、情報配列を詳述する湯浅(2006)⁷⁾は、「子ども向け」の文体に近づけ、小学生にとってわかりやすい文章とされる特徴として、次の 3 点を挙げつつ、考察を深めている。

本稿では、一般の新聞と小学生新聞を対象に、子ども向けの文章の情報の配列を見ていった。その特徴をまとめると次のようになる。

I 文章の凝縮化を解く

II 「逆三角形型」を強化する

III 「因果関係」や「時間的配列」といった、小学生にとってわかりやすい順序にする

(中略)一般の新聞と小学生新聞で、情報の配列にちがいを出すのは、こうした内容の理解度に対する配慮だけではなく、小学生が抱く関心を考慮してのものと思われる。

本調査対象は、小学生が書いた投書が多い(4 章にて詳述)。子どもが「子どもらしさ」を生成する、とは言い難い。しかし、文体の特徴として、前節の引用を踏まえた検討「投書のきっかけとして読んだ文章が即座に影響する」や計量的分析結果「デス・マス体は、1 文の文長が短くなる傾向がある」などと合わせて考えてみると、次のようなことが言えるだろう。

小学生新聞の通常の文章は凝縮化を解き、1 文単位においても平易に書かれる。この文体の影響を受けた投書者は、同じく 1 文単位を平易に書き、1 文における語句が減少し、つまりは文字が減少する。それが「わかりやすい文章」として形成されている。

また、小学生新聞における振り仮名は、設樂(2019.3)⁶⁾にて考察した。そこでは、読み手に知識の定着を求め、同語の 2 回目以降の振り仮名を削除する現象を指摘したが、投書ではそもそも漢字表記が可能な単語をひらがな表記にすることがあり、「知識の定着を求める」ような学習効果を狙ったものとは考えられない。通常、小学生新聞で漢字表記が可能な単語をひらがな表記にするのは、中学生以上で学習する教育漢字の場合であるにも関わらず、小学生で学習する教育漢字、あるいは、投書者の学年を考慮すれば学習したはずの教育漢字をもひらがな表記にする例が認められるのだ。例えば、「原子力」「原し力」、「被災者」「ひさいしゃ」、また、1 件の投書に「私」「わたし」を混用するものがある。

こうした不統一は、読者が生成する「子どもらしさ」あるいは「素人らしさ」として、あえて表記しているのではないだろうか。通常の編集方針に則った文章でない、用字の不統一のまま、あるいは、文体が混用(デス・マス体とダ・デアル体が 1 件の投書内で混用する)したまま、そうした文章スタイルが表記されるのは、本来であれば、新聞としての整合性を保つため、編集過程で修正されるべきだろう。しかし、修正しないことで、「子どもらしさ」あるいは「素人らしさ」を読者に印象付けるのだ。

4. 投書者の詳細

次章では、計量的分析では解明できないことを検討する。2 章で述べた、投書の前提とされるイデオ

ロギー的内容、つまり、次世代を担う小学生にとってのエネルギー問題を読者自身が意見交換する、そうした枠組みの元に掲載された投書それぞれの、テーマや視覚的なレイアウトを分析する。投書に述べられた投書者の願いや怒りといった情動が強く、深いものだったからこそ、投書として掲載され、しかも、書籍になって出版されたのかもかもしれない。そうした投書の構造を見る前に、本章では投書者について整理する。

投書者は、ここまで一括して、小学生新聞の読者として扱った(表1では、(A) (B) (C)とした)。しかし、2011年時点では、電力会社別に電力供給地が限定されていたし、読者とはいえ大人の投書者と判断できる投書が含まれる。改めて、投書末尾に明記される、「(東京都小平市 S・H君 小6)」のような投書者の情報や、一部、『僕のお父さんは東電の社員です』を参考に、投書者を集計した。その結果は、表2である。学年において補足すると、「小学生以外」は中学生3名、大学生1名、母2名、70歳代1名であった。

表2 投書者の分析

電力供給会社		学年		性別	
北海道電力	1人	小学2年生	1人	男性	11人
東北電力(福島1校)	7人	小学4年生	7人	女性	23人
東京電力 ⁵ (2校含む)	22人	小学5年生	6人	不明(関東1校)	5人
中部電力	1人	小学6年生(2校含む)	16人		
関西電力	4人	小学生以外	7人		
九州電力	2人	不明	2名		
不明	2人				

投書者は、ゆうだい君(東京都)と同じ「東京電力」が圧倒的に多かった。学年においても、ゆうだい君と同じ「小学6年生」が最多で、約4割(計39人を母数とする)である。なお、7月27日は、「東北電力」とした福島県郡山市立赤木小学校4年2組による投書であった。この7月27日は、当校からの意見文を掲載するとともに、編集部が当校を取材した記事も掲載している。この被災地の4年生を除くと、より一層6年生に偏るものとなる。一方、『僕のお父さんは東電の社員です』には、新聞掲載の投書より多く低学年の文章が採用されていた。それらは、文章というには短すぎて、そのために論理性を欠いて感情的な主張に読めるものが多い。新聞では、ある程度の論理構成があり、意見としての説得性が求められるようだ。

性別においては、ゆうだい君と異なる「女性」が3分の2以上で「男性」を圧倒した。佐竹(2009)にて男女比は、全体では「それほど差がないが、年代別に見ると、若い層では女性の数の方が多」と指摘する。本稿の調査対象は、小学生、つまり10代以下の投書者で、佐竹(2009)の「若い層」に入り、一般紙の結果と合致する。

表2の結果から、本稿の調査対象を末尾の「資料」のように区分し、いずれも掲載順に通し番号を付した。

- (A)投書者が小学生であることが判明した30件
- (B)投書者が中学生以上であることが判明した7件
- (C)投書者の年代が判明しなかった2件

引用する場合は、上記の分類に従って、通し番号とともに資料を示す。

5. 投書のテーマ、言語的手段そして構成

分析の観点として、誰にとって第一に主張すべきことが何であったか、そのテーマに注目する。次に、意見を述べる立場がどのようなようであったか、言語的手段を検討する。最後に、見出しや視覚的なレイアウト

トに注目し、1紙におけるテキストの構成を分析する。

(1)テーマ：第一に主張すべきこと

「次世代を担う小学生にとってのエネルギー問題」というテーマは、大まかに2系統が認められる。一つは今後の電力供給の課題、もう一つは3.11原発事故の責任の所在である。その他、福島県郡山市立赤木小学校4年2組の投書の一部に、エネルギー問題に終始しない現実的な行動を求める内容が認められる。

まずは今後の電力供給の課題を主張する投書を、抜粋して示す。

(A-4)(前略)たしかに原発なら二酸化炭素は出ません。しかし、原発のタービン建て屋の中では、燃料ぼうをくぐらせた熱湯を海水で冷やし、海水をそのまま海にもどしています。これでは、ただ海をあたためているだけだというのが僕の意見です。

(B-1)(前略)かんたんに原発からののがれることはできないでしょう。でも少しずつでいいから、電気にたよらない生活を心がけてみればいいと思います。

(A-4)は、原子力発電が地球温暖化を防ぐ電力供給には不可欠であったと論じる「ゆうだい君の手紙」に反論する。(B-1)は、引用部分の前部にて、電力会社だけに責任を負わせるのではなく、電気を使う国民全体の責任を指摘しているが、引用の主旨では、電気による便利で安心した生活に依存し過ぎないことを訴える。

一方、(A-1)(B-3)(A-15)は、責任の所在を追及する。

(A-1)ゆうだい君の「みんなで考える」という意見には大賛成です。でも、東電の社員ばかりに責任はないと言いたいようなゆうだい君の考えは甘いと思います。(以下、略)

(B-3)ゆうだい君の考え方は間違っていない。(略)東電だけの責任ではなく、そこまでして電気を作りだすことを望んだ、国民全体の責任なのです。(以下、略)

(A-15)(原発の管理についての)長年にわたる認識の甘さは、東電の社長が悪いのでしょうか。(中略)とすると、社長だけの問題ではなく、東電全体の体質がいけないのだと私は思います。

以上に挙げた「第一に主張すべきこと」は、小学生(A)か小学生以外(B)かに関わらず、責任の所在を追及するものが多かった。

そのほか、エネルギー問題に限定しない意見がある。福島県郡山市立赤木小学校4年2組の投書である。これらの投書は、未来を見据えた眼前の現実的課題を優先すべき、と訴える。

(A-26)「風評被害」という事件もあります。(中略)今、福島県民でマスコミをやっている人が、本当の今の福島の状態を伝えればよいと思います。

(A-27)私たちに今何ができるのか、その一つ目は、マスクとぼう子を着用することです。(中略)東電も悪いし、正しい情報を送らない政府も悪いと思います。けれど、自分たちでできることは、実行したほうがいいと思います。

この2例が指摘する現実的課題とは、風評被害と「正しい情報を送らない」悪について、つまり、報道が引き起こした二次被害である。二次被害について述べるということは、エネルギー問題から逸れることでもある。東北にいない読者たちによる、およそ、被災地では当面の課題とはいえないエネルギー問題や責任所在(掲載時点で、東電の責任は明らかになり現地での謝罪が済んでいる)の議論は、被災者にとって虚ろなものと感じられたのだろうか。放射能汚染におびえる現実のなかで、何を思っただろう。被災者としての投書は、改めて(3)で検討する。

(2) 言語的手段：意見を述べる立場

被災者以外にも、投書者の立場を明示した特徴的な述べ方が認められる。例えば、70歳代の投書者による(B-3)は、1999年東海村JCO臨界事故に触れて、風評被害や都心の電力供給の課題を批判する。読み手(ここでは小学生)の知らない過去について語る部分を抜粋する。

(B-3) 1999年9月30日、茨城県ではJCOで放射能が飛び散る事故がありました。今と同じで、茨城県産の農作物が全く売れなくなってしまいました。東京の市場に行き、買ってくれるようお願いをし、夜、高速道路を茨城へと帰ってきました。その時見た、まばゆいばかりの東京の夜景が今も忘れられません。

1999年は、2011年現在に小学生であれば生まれていないか、生まれていても乳児である。投書者は、読み手が知らない情報としてJCOの事故を語る。その後(B-3)の投書は、下記のように結ばれる。その末尾を読むと、世代を超えた投書者から、読み手への期待を述べていることがわかる。結びにおいて、直接的に読み手に訴えた投書はほかにもある。投書者の年代として「3児の母」とある(B-5)は、東京電力が安全よりお金儲けを重視した責任は取らなければならないことを訴えて、読み手への期待を述べる。

(B-3) 私はすでに70歳を超えました。やがてううだい君たちが背負うであろう次の世代には、心の豊かな社会を築いてほしいのです。ううだい君のような、しっかりした考えの若者がたくさん育ってきてくれることを期待しています。

(B-5) みんなでアイデアを出し合って、答えをえらぶとき、少々の「もうけ」よりも、命を大事にする大人になってください。

このように、読み手を子どもと位置付け、投書者としての自分自身を大人だと位置付ける投書がある一方で、ううだい君と同じ子どもの立場だと位置付けて主張する投書もある。投書群の1件目は、誇りをもって働く父を例にううだい君を励まし、共に成長することを呼びかける。

(A-1) 僕たちは、毎日勉強できる環境、毎小を購読できることに感謝して、今僕たちにできることを精いっぱいやって、いつか日本の役に立つ大人になりましょう。

対大人の視点としては、小学生ではないものの、中学1年生の(B-2)が、私たち(子ども)が節電しているのだから大人も(節電)してほしい、と訴える。(A-10)は、原発事故前の原子力発電に関する情報が誤りだったとして大人を糾弾する。

(B-2) 私も、節電を心がけています。学校の友だちも協力しています。だから、大人の人たちも、協力してほしいです。

(A-10) そんな教育を受けた私たちが、原発はあぶない！つくらないほうがいい！という意見をもつことができたのでしょうか。これからみんなで話し合っ、大人が何を間違えたのか、を考えていく必要があると思います。

意見を述べることは、(原子力発電に、または東京電力の責任に)「是か非か」を明示するだけではない。意見の根拠や推論の精緻さに加え、投書者が「誰へ何を伝えたい」と願って投書するのか、自覚していることも主張を強めるのだと考えられる。調査対象の投書を含め、編集部に寄せられ掲載されなかった投稿も合わせ、一連のううだい君への手紙が書籍になった事実は、本節で見たような直接的な訴えが読者の心を強く刺激した結果だと考えられる。

(3)テキストの構成：見出しと写真

ここでは、投書の掲載順あるいは、投書の脇に添えられる見出しや写真といった、掲載時の構成を分析していく。

まず、掲載の前提として、投書の元となる意見文の募集時点、次世代を担う小学生にとってのエネルギー問題を読者自身が意見交換する、という枠組みがあった。この前提に含まれる「読者自身」とは、「ゆうだい君」を踏まえると、表2の分析における最大値、「東京電力」に電力供給を受けている「小学生6年生」であろう、と考えられる。(ただし、表2の性別の最大値「女性」が多いことと、前提との因果関係は不明である。)

では、見出しの分析に入る。5月30日に投書掲載が始まり、以下のように、ゆうだい君への励ましや賛成意見が1面を飾る。見出しの大きい順に挙げる。

- ・批判されてもプロとして力発揮を
- ・ゆうだい君の手紙上
- ・全国の読者から反響
- ・原発の安全性 さらに向上を
- ・大変なのは東電だけじゃない／東電だけが悪いんじゃない／まずは、謝るべきだ

1面最後は、反論(A-2)が配置されるが、ここで最大の見出し【批判されてもプロとして力発揮を】は、投書と合わせて読むと、ゆうだい君のお父さんを励ます意図であることがわかる。写真を伴う【原発の安全性 さらに向上を】は、原発存続が前提条件とみなせる。この面に掲載された写真は2枚あって、【原発の安全性】を付したG8サミットで記念撮影する首相らのほか、全国の毎小読者から編集部へ届いた手紙があった。裏をめくって2面は、「電気にたよらない生活を」が繰り返される(見出しは下記の通り)。2面の写真は1枚、ゆうだい君の手紙のみである。

- ・電気にたよらない生活を心がけてみる
- ・ゆうだい君の手紙上
- ・電気にたよらない生活を／ゆうだい君の手紙

以上、5月30日ではゆうだい君の手紙を強調し、ゆうだい君をクローズアップするように始まるものの、原発の安全性を求め、電力使用の削減を繰り返し、徐々にエネルギー問題へと、意見の観点が移っていく。

翌日の5月31日は、風評被害の記事と「ゆうだい君の手紙」を1面に掲載し、「ゆうだい君の手紙」では【具体例あげて反対・賛成を】が最大の見出しである(見出しは下記の通り)。2面は、【電気を望んだ、国民全体の責任】と続き、6月1日の1面【お金より命を大事にする大人に】、2面【原発を止めるのではなく】と続く。賛否を織り交ぜているが、原発を肯定しながらゆうだい君の賛同派が多いことをうかがわせる。

- ・きらめく「佐藤錦」
- ・具体例をあげて反対・意見を
- ・風評被害に負けず
- ・福島にあることが、おかしい／日本人がまとまるチャンス／原発だって温暖化につながる／被災者の気持ちを／原子力にたよりすぎ

この6月1日2面【原発を止めるのではなく】にて、第一弾の投書の特集「ゆうだい君の手紙」が終了する。2面に掲載する写真は、爆風で骨組みだけになった福島原発1号機で、写真下に「爆発で骨組みだけになった福島原発1号機。原発は必要なのか？もういらぬのか？」と、問題提起を重ねる。なお、投書の募集は1面に【まだまだ募集】の見出しで呼びかけている。

3週間後6月20日に再開した特集「続ゆうだい君の手紙」は、1面の見出し【原発は「もろはのつぎ」】といった原発の非難から始まる。投書の隣の囲み記事は、【こうやって測るんだよ 小学校で線量計を経験】を見出しとして、授業の一環として体操着を着てマスクを付けた子どもたちが線量計を使う写真を写す。2面で【いいわけにしか聞こえない】と強い口調で東電批判をする投書とともに、ゆうだい君に

部分的に同情する投書が掲載される。今まで、ゆうだい君に賛同する意見を上段に置き、どちらかと言えば賛同派を強調していた性格は薄れ、議論の深まりを暗示させる。

翌6月21日は、小学校2校、2クラス分の投書がまとめて掲載された日で、1面の見出しは【命と電気のどちらが大切か】から始まる。大人の責任を論じる投書が5本、投書者であろう小学生の集合写真とともに掲載される。この6月21日には、再度【意見を送ってください】という囲み記事による、投書募集がある。募集記事の一部には、「ゆうだい君が望んでいた『みんなで話し合う』ことが紙面を通してできました。意見はさまざまでしたが、共通しているのはこれまでにない節電の大切さです。」とあって、編集部は投書群が一定の役目を果たした、と考えていることが受け取れる。

約1か月後、7月27日の福島県郡山市立赤木小学校4年2組の投書では、【本当のことが分かるよう勉強を】とあり、5章(1)に述べた、「報道が引き起こした二次被害」の中にいる被災者から安全や安心、正確性の希求が述べられる。2面は【行政、東京、政府が悪い】という見出しだ。東北にいない投書者、「報道が引き起こした二次被害」を実感しない投書者とは違う観点で、事故責任を追及する。そして、「本当の」知識や情報による正義を求めている。ここで1面の写真は、6月21日のクラスごとの投書と同じく、投書者であろう小学生の集合写真だ。2面にも写真が2枚あり、放射能汚染を危惧する赤木小学校の日常として、誰もいない運動場に敷かれたブルーシートを写したものと、窓が開けられずに教室の隅で回る扇風機を写したものが掲載された。読者と変わらない小学生が、読者とは違う小学校生活を送っている。自分たちが使わない東京の電力を作るための原発が爆発していること、危険な原発を受け入れた福島の行政、責任を取らず正しい情報を発信しない政府、避難先で福島出身と分かればいじめられる事実、そうした怒気と嘆きは、最後の投書の2文に明示される。

(A-30)僕は、あったことをきちんとと言わない人が一番きらいです。人にめいわくがかかるからです。

こうした被災者の投書は、(1)でも述べた通り、これまでの投書と質が異なる。異質性があるにも関わらず、あえて取り入れ、しかも、議論の深まった後に置かれた。これは、表2に挙げた投書者の全体が、異質性をもたらす投書者を含めて読者全体を網羅するもの、と企図されていたからかもしれない。

(4)まとめ

投書のテーマは、事故責任の所在を追及するものが多い。その意見の述べ立てにおいて、投書者が「誰へ何を伝えたい」と願って投書するのか、直接的な訴えは読者の心を強く刺激するものだと考えた。投書全体の構成として、投書のきっかけとなったゆうだい君への賛同を基調に始まり、エネルギー問題、事故責任の所在へと議論が深まり、最終的に二次災害を被る投書者による、怒りを込めた主張で幕を閉じた。

6. おわりに

小学生新聞の投書では、本紙全体に通底する「わかりやすい文章」の形成が認められるものの、用字や文体の不統一を露呈することで読者へ「子どもらしさ」あるいは「素人らしさ」といった印象を与えていた。小学生が手本にすべき文章文体は、投書以外の本文であり、投書では投書者の手による「本物らしさ」が強調されるのだ。また、新聞では、小学生対象であっても、ある程度の論理構成があり、意見としての説得性が求められる。意見は、テーマを明示することと別に、その述べ方によって、もしくは述べるべき願いの強さによって、強い訴えを確認した。さらに、見出しや写真によって、投書掲載の構成を分析して、概ね編集部が募集した経緯に沿った流れがあることを確認した。その流れとは、ゆうだい君と読者同士が活発に意見を交換する、というものだ。また、連載の最後に被災者の投書と取材を掲載することで、読者全体を網羅した意見交換だった、と位置付けるのではないかと考えた。

以上本稿では、3.11 原発事故後のエネルギー問題を中心に、小学生新聞の投書の全体像を述べてきた。

(設樂)

しかし、エネルギー問題を注視するなかで見落とししたものもあると思う。それは、投書者側の、投書を書く動機である。投書者の日常が変質したことで生じた強い情動が、文章を書く動機になったことがうかがえる投書があった。報道情報を受容した結果、当時の社会に広まる空気を感じ取って、投書者が帰属する集団が変質していったことは、複数の投書に描写されたいじめや節電生活にうかがえた。誰に向けていいか分からない怒りや疑い、不安、正解を求める気持ちなどが、誰かに訴えたい強い願いになったとき、人をつき動かす文章、より多くの読者を得る文章になるのではないだろうか。

資料

毎日小学生新聞 第26025号、第26076号、第26088号、第26089号、第26090号、第26108号、第26109号、第26144号(いずれも2011)より調査対象の見出しを示す。

第26088号より (A-1)大変なのは東電だけじゃない (C-1)東電だけが悪いんじゃない (A-2)まずは、謝るべきだ (B-1)電気にたよらない生活を

第26089号より (B-2)福島にあることが、おかしい (A-3)日本人がまとまるチャンス (A-4)原発だって温暖化につながる (A-5)被災者の気持ちを (A-6)原子力にたよりすぎ (A-7)みんなが節電すべきだ (B-3)心の豊かな社会を築いて

第26090号より (B-4)東電や政府は逃げずに問題解決を (A-8)地震で学んだことを忘れずに (B-5)東電はもうけを重視した (A-9)電力会社がないと生活できない (B-6)私たちは原発の恩恵を受けている

第26108号より (A-10)大人が何を間違えたのか、話し合おう (C-2)役に立つが傷つけることもある (A-11)東電は本当の情報を出して (A-12)東電は人々をだました (A-13)原発に反対する声は前からあった (B-7)大人たちにも責任がある

第26109号より (A-14)母は経済産業省の職員 (A-15)東電の体質が悪い (A-16)日本の大人たちの責任 (A-17)電気は必要だけど… (A-18)国民も、政府も、東電も悪い (A-19)自分たちと… (A-20)僕のお父さんも… (A-21)いままで… (A-22)原子力発電所から… (A-23)これからは、…

第26144号より (A-24)原発を造る時に考えていれば (A-25)未来をどうするか考えよう (A-26)風評被害防ぐのはマスコミ (A-27)まずは自分たちができることを (A-28)自然災害軽く見ていた (A-29)福島の大変さ分かってない (A-30)あったことを正しく伝えて

参考・引用文献

- 1) 佐竹秀雄, 『メディアとことば』 4, 96-125 (2009)
- 2) 森達也, 「僕のお父さんは東電の社員です」, 現代書館, 東京, pp.217-221 (2011)
- 3) 樺島忠夫, 寿岳章子, 『文体の科学』, 綜芸社, 京都(1965)
- 4) 「形態素解析システム MeCab」 <https://www.mlab.im.dendai.ac.jp/~yamada/ir/MorphologicalAnalyzer/MeCab.html>
- 5) 湯浅千映子, 『学習院大学国語国文学会誌』(50) 87-98 (2007)
- 6) 設樂馨, 『京都女子大学図書館情報学研究紀要』 6, 31-38 (2019.3)
- 7) 湯浅千映子, 『文体論研究』(52) 41-55 (2006)
- 8) 名嶋義直, 神田靖子, 『3.11 原発事故後の公共メディアの言説を考える』, ひつじ書房, 東京(2015)

¹ 子ども向けの新聞は2019年現在、全国紙として「朝日小学生新聞」「毎日小学生新聞」「読売 KODOMO 新聞」、ほかに大人向けの地方紙やブロック紙に折り込まれたもの、学校配布による新聞が存在する。

² 樺島・寿岳(1965)³⁾で示された文体指標の一つで、「形容詞・形容動詞・副詞・連体詞の組の比率 M に 100 をかけたものを動詞の比率 V でわった値」。

³ 調査対象において、ダ・デアル体は2件のみである(ただし、1件のなかの混用も認められる)。

⁴ 家庭や商店を含む、電力の小売全面自由化は2016年4月1日からである。

⁵ 富士市1名を含む(正確には東京電力エリアは富士川以东である。富士川は富士市内を流れ、投書者が富士川の東西、どちらに居住しているのかは未確認である。)